# 15［評論］『─漢字の世界観─』

［１］　白川さんは『初期万葉論』のなかで、日本の和歌が漢字仮名まじりに書かれていったことについて、「言語①的で、同時に文学表現的だった」と解説しています。日本人は自分たちの言葉づかいを捨てずに漢字の使用法を工夫し、その漢字の使い勝手を工夫しきっていくことで、日本語の言葉による表現力をさらに高めることに成功したのです。

［２］　白川さんは、ここに日本の言語文化の基本を見たのです。日本の国語文化がもつ②原点を見たのです。

［３］　まとめていえば、日本は③「歌」によって国語をつくったのでした。そう、ａダンゲンしてもいいとおもいます。いやいや、国語だけではないともいいたい。今日、伝統文化とか和風文化とよばれている多くの日本文化の特質の大半が、ここからｂハセイしたというべきでしょう。（中略）

［４］　これを言い替えれば、中国の最も古い『』がその後の中国のｃ詩歌の基盤になっただけではなく、絵画や舞踊の基盤になったように、日本の『万葉集』にはじまった「歌」の数々は、また「歌」が秘めた作用と技法と含意と思想は、その後の日本文化のいわばＯＳ（オペレーション・システム）のような基盤となって、たとえば連歌を、たとえば能（謡曲）を、たとえば大和絵を、たとえばを、たとえばを、たとえば茶の湯を、たとえば浮世絵を生んでいったということになります。

［５］　［　　Ａ　　］、能や大和絵や枯山水や茶の湯は、その根底にいつも「④和漢両用の詩歌」を下敷きにしていたからです。それはデュアル・スタンダードだったのです。［　　Ｂ　　］、このことこそが、日本の遊芸における「」の発展だったのです。漢字という「外来のコード」をつかって、これを日本文化にふさわしい「内生のモード」に編集しなおすという、画期的な⑤「興」の発展だったのです。

［６］　漢字の世界は、こうしていまなお日本に多様多彩に生きつづけることになりました。漢字だけが他をｄ排斥して生きつづけたのではありません。日本社会と日本文化の状況と場合に応じて、［　　Ｃ　　］デュアル・スタンダードの一部となって共生し、ｅキョウメイし、共応しつづけたのです。

●語注

詩経＝中国最古の詩集。孔子の編と伝えられるが未詳。西周から春秋時代に及ぶ歌謡三〇五編を、風（民謡）、雅（朝廷の音楽）、頌（祖先の徳をたたえる詩）の三部門に分けて収録。

オペレーション＝運転・操作。ここでは、その後の種々の日本文化を生み出していく源泉。

連歌＝古典詩歌の一体。短歌の上下句を分けて二人で問答唱和することに始まり、万葉集に大伴家持と尼との唱和の例がある。その後時代とともに芸術詩として確立する。

枯山水＝水を用いずに、石・砂などにより風景を表現する庭園様式。室町時代、北宋画などの影響を受け、完成された。京都・龍安寺の石庭などが有名。

■覚えておきたい語句

□11含意……………………意味を中に含み持っていること。

□14根底……………………物事の土台となっているところ。根本。

□15遊芸……………………趣味として楽しむ日本の芸能。琴・三味線など。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①「思惟」の意味を、次から選べ。（4点）

ア　思案　　イ　思考　　ウ　思潮　　エ　思慕　　オ　思慮

〔　　　〕

問２　傍線部②とは何か。本文中の語句を用いて、五〇字以内で説明せよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部③について、歌が「　」で示されている理由として最も適当なものを、次から選べ。（7点）

ア　そもそも日本の「歌」は、万葉集にはじまっていることを強調するため。

イ　唐詩や古体詩など、様々な形式の詩を含んでいる中国との差を強調するため。

ウ　筆者の文体の特徴として、強調したい語句を「　」で示しているから。

エ　『万葉集』だけでなく、『古今和歌集』以降の和歌などを含むから。

オ　歌が、その後の日本文化の基盤となる連歌に発展したことを示すため。

〔　　　〕

問４　空欄Ａ〜Ｃに入る語句の組み合せとして最も適当なものを、次から選べ。【読みのセオリー】（6点）

ア　Ａ　しかし　　　Ｂ　そして　　Ｃ　じつは

イ　Ａ　じつは　　　Ｂ　だから　　Ｃ　そして

ウ　Ａ　なぜなら　　Ｂ　そして　　Ｃ　まさに

エ　Ａ　じつは　　　Ｂ　ただし　　Ｃ　そして

オ　Ａ　なぜなら　　Ｂ　しかし　　Ｃ　まさに

〔　　　〕

問５　傍線部④とあるが、具体的にどのような内容を指すか。本文中から二五字以内で抜き出せ。（7点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部⑤の意味を表す熟語を、次から選べ。（6点）

ア　振興　　イ　興奮　　ウ　復興　　エ　興趣　　オ　興亡

〔　　　〕

問７　本文の趣旨に合致するものを、次から二つ選べ。（6点×2）

ア　日本の国語文化は、『詩経』が中国の詩歌の基盤となって中国文化が発展していったのと同様に、『万葉集』が基盤となって発展した。

イ　中国の『詩経』が中国文化の基盤となって発展していったのと同様に、漢字の輸入により、日本文化の基盤となって発展した。

ウ　日本人は漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語による表現力を高め、和歌という「和漢両用の詩歌」を生み出した。

エ　日本人は漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語による表現力を高め、他の文化を凌駕する日本文化を創った。

オ　能や大和絵や枯山水や茶の湯こそが、日本語のもつ表現力によって生み出されてきた日本独自の文化として発展してきた。

カ　日本人は中国文化に同化しながら、漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語による表現力を高め、独自の言語文化を創った。

〔　　　〕〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ断言　ｂ派生　ｃしいか　ｄはいせき　ｅ共鳴

問１　イ

問２　漢字の使用法や使い勝手を工夫しきっていくことで、日本語の言葉による表現力をさらに高めること。（46字）

問３　エ

問４　ウ

問５　日本の和歌が漢字仮名まじりに書かれていったこと（23字）

問６　エ

問７　ア・ウ

【読みのセオリー】

★接続語を手がかりに読む

　接続語は、文と文、節と節、句と句、語と語などの構成要素同士の関係を示す役割を担う品詞の一つ。

　その関係は、順接・逆接・理由・例示・説明・累加（添加）・対比・転換に分類できる。

　副詞が接続語として一部用いられている。（たとえば・つまり・ようするに・いわば　など）

〔要　約〕

　６段落は、［１］〜［３］段落と［４］〜［５］段落のまとめになっている。

　したがって、［１］〜［３］段落、［４］〜［５］段落をそれぞれ要約し、連結させるとよい。

　　　　　　↓

　日本の国語文化の原点は、漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語の表現力を高めたところにある。『万葉集』にはじまる「和漢両用の詩歌」はその後の日本文化の基盤となり、日本の遊芸における「興」を発展させた。（100字）

〈筆者＆出典〉松岡正剛（まつおか・せいごう）一九四四（昭和19）年京都府生まれ。編集者、著述家、日本文化研究者。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授を経て、現在、編集工学研究所所長・イシス編集学校校長を務める。主な著書に、『日本という方法』『地の編集工学』など。本文は、『白川静─漢字の世界観─』（平凡新書、二〇〇八年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊問１差し替え

問１　空欄①（2行目「白川さんは『初期万葉論』のなかで、日本の和歌が漢字仮名交じりに書かれていったことについて、「言語思惟的で、同時に文学［　①　］的だった」と解説しています。）に入る最も適当な語句を本文中から抜き出せ。

［答］　表現

＊新問

問　18行目「漢字の世界は、こうしていまなお日本に多様多彩に生きつづけることになりました。」とあるが、どのようにして漢字はいまなお日本に多様多彩に生きつづけているのか。最も適当なものを次から選べ。

ア　漢字は外国から輸入されたものだが、他の文字を排斥して、唯一漢字だけが日本文化の一部となっている。

イ　漢字は外国から輸入されて他の文字と融合して、他の文字と共存共栄しながら日本文化の一部となっている。

ウ　漢字という外国から輸入された文字を使って、他の文字と共に日本社会や文化に相応しい表現力を身につけている。

エ　漢字という外国から輸入された文字を使って、独自の工夫と表現力を身につけて日本の文化の一部を形作っている。

オ　漢字という外来の文字が日本社会の中で独自の進化を遂げ、他の文字にない表現力によって日本文化の一部となっている。

［答］　エ

■要約の方法　★各段落の柱の文をもとに各段落を要約する

《［１］〜［３］段落・［４］〜［５］段落・［６］段落の大きく三段構成》

［１］　日本の和歌に関して、日本人は漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語の言葉による表現力をさらに高めた。

［２］　（［１］段落のことは）日本の国語文化の原点である。

［３］　「歌」によって日本の伝統文化や和風文化が派生した。

［４］　『万葉集』にはじまった日本の「歌」の数々が、その後の日本文化の基盤となって、連歌や能や枯山水や茶の湯などを生んでいった。

［５］　日本文化の根底に、漢字仮名まじりである「和漢両用の詩歌」があったことが、日本の遊芸における「興」の発展だった。

［６］　こうしていまなお漢字は、日本文化の中で多様多彩に生きつづけている。

■本文の要約■

日本の国語文化の原点は、漢字の使用法や使い勝手を工夫し、日本語の表現力を高めたところにある。『万葉集』にはじまる「和漢両用の詩歌」は、その後の日本文化の基盤となり、日本の遊芸における「興」を発展させた。（101字）